福泉寺寺報　ぜんこう　第103号

染香 ぜんこう

福泉寺寺報
令和4年1月
第 108 号
毎月 1 日発行

知らなかったことを知る

先日、書類庫を整理していると、お寺のことが詳細に記されたものがたくさん出て参りました。大興奮です。

五代前の「濯龍（たくりゅう）」という住職が書いたものがほとんどでした。濯龍について本願寺に問い合わせてみると、住職の在任期間は明治7年～大正6年でした。一番新しい本堂再建が大正11年ですから、おそらく火事で記録も消失したかと思われます。その責任もありながら、知りうる限り記録をしたのでしょう。胸が詰まります。

さて一部を紹介します。

○福泉寺の開基は天文（てんぶん）11年（一五四二）初代住職は了心（りょうしん）。ちなみにこの年に生まれたのは、徳川家康・服部半蔵などです。

○享保9年（一七二四）に「本堂建立」とありました。これより前に1度火災があったようです。

歴史好きな人の気持ちが分かるような気が致します。

おいしい ほっとする 時間

（住職 常子）

NHK『ファミリーヒストリー』という番組は、ある一人の人物から親・祖父母・曾祖父母…とさかのぼっていきます。番組制作には一回ずつ違う担当プロデューサーが当てられ、刑事顔負けの現場調査をしていくと、必ず「これは」と思う事実に出逢うのだそうです。

そもそも、この番組が始まったきっかけは、初代プロデューサーの小山さんという方が、義父について調べたことだそうです。

家の歴史を知ると、生き方が変わるかも知れませんね。

ついこの間も、ある方が朝のお勤めに義父のジャケットを着てお参りになられました。

お寺にお参りすることを喜んだ人だったそうなので、「今朝は一緒に参られましたね」と申し上げました。

時代のうねりの中で生きてきた一人の人間の生活史。そして家族史です。

誰かの「伝えたい思い」と、誰かの「受け取りたい思い」が1つになった、味わい深い世界です。

いかがでしょう。

（住職）

【できる！自宅葬・寺葬】

「昔は自宅葬だったが、手間と周囲の協力が無いと難しい」「寺での葬儀は費用が不透明だ」などという消極的なイメージが強いため、敬遠されがちです。しかし、「家族葬」がメインになりつつある昨今、逆に家でも寺でも葬儀がしやすくなったということが分かってきました。昨年は4軒の「自宅葬」が営まれました。やっぱり「家」が一番だ、という考えの方もおられます。今年はこれらにまつわる記事を連載しようと思います。

ちょっと　あたまの　こりほぐし

ある昆虫の母親は

いつも気取らず、着飾らず、自然体。

さて、どんな虫でしょうか？

こたえは裏面です

おてらより

駐車場拡張工事いたします

・山門前の駐車場の南側の畑を駐車場にいたします。お誰りくださった石井様、改めて感謝申し上げます。行事はもちろんですが災害時のためにも役立ててまいります。

お晨朝（どんちょう）（朝のおつとめ）

・毎朝6時半～7時

爽やかに一日を迎えられたら、この上ない喜びです。

のうこつぼについて

・2つ目も残りわずかとなりました。宗派、門徒さんの内外を問いません。お墓でお困りの方は、どうぞお気軽にご相談ください。

阿弥陀さまに願ってよいか

大阪　西法寺　星野　親行

大阪の津村別院が発行している月刊誌『御堂さん』の中で、受験生の合格祈願の話題で「気のすむまで阿弥陀さまにお願いすればいいんです」という記述をめぐって、「**祈願をしない浄土真宗であるのにケシカラン**」や、「**大変気が楽になった**」など、さまざまな意見が寄せられ、話題となったことがございました。

この「阿弥陀さまに願ってよいか」という問題は、わたしにとって、**「阿弥陀さまという如来さまはどういう意味を持っているのか」**という問題であるように思います。私は、阿弥陀さまは、「私の欲望をそのままに満たしてくださるかた」とは思っていません。だからといって「願いごとをするとは何ごとか！」と、突き放したりするかたでもありません。

いつもいつもお聞かせいただくことでありますが、阿弥陀さまは私を願い続けてくださっておる如来さまであります。この願いのはたらきは**私の心持ちで左右されるものではありません。**阿弥陀さまのご本願のおはたらきは、完全に私を超えぬんでくださっておるのであります。

私を超え、私を包んでくださっている阿弥陀さまであるから、その阿弥陀さまには、「何を言うてもええ」という一面が確かにあると思うのであります。阿弥陀さまには何でも言える、何でも相談できる。だから安心できるんです。

だけどもそこで思いますのは、私の思いのありったけをお聞きいただくのであって、決して阿弥陀さまに私の欲望の実現を祈ったり頼んだりするのではない、私の我欲を叶えてくださる如来さまであると考えてはいけない、ということであろうと思います。むしろ、**「私が本当に願わねばならないものは何か」**を、私にお教えくださるのが親鸞聖人のご法義であり、阿弥陀さまであるということではないか、阿弥陀さまは私にとってそういう如来さまではないでしょうか。

浄土真宗の利益とは何かということについて親鸞聖人は、阿弥陀さまを拝んでお念仏を称えて、何か利益を待るんじゃあないとおっしゃる。じゃぁなんやというと、**阿弥陀の前に座ってお念仏を申す身になったことが、何よりもの利益なんだ**、広大の利益なんだとお教えくださるわけです。お念仏して阿弥陀さまにお参りして、これで何とかしようというのは違うのです。今、お念仏でさておることが、阿弥陀さまと一緒におることなんだよ、ということであります。

お寺やお仏壇には「参る、お参りする」と言いますね。参るとは**「降参する」**ことです。降参するというのは、全部置いていくことです。**自分の持って行きようのない思いや、どうしようもない気持ちを置いて行けるのが、阿弥陀さまの前なのであります。**

私は、例えば子どもが熱を出してゼーゼー言うてる時なんかは、阿弥陀さまの前に座って、「何とかしたって下さい」と思う。思うけれどもそれだけです。阿弥陀さんに聞いてもろうておしまいです。だけど聞いていただいて、少し気が楽になるということがあるんです。

阿弥陀さまはその私の思いを、黙って引き受けてくださるのです。阿弥陀さまの前で何を言うても、阿弥陀さまは顔色をお変えになることはありません。「お木像や、当たり前やないか」なんておっしゃらんといてくださいや。阿弥陀さまはいつも同じお顔です。これがありがたい。阿弥陀さまは私のすべてを知っておってくださって、しかも**私を支え、救うことに一点の迷いもないから、いつも同じお顔をなさっておられる**んでしょう。そして、私がどんな状況になって、何を考えていても阿弥陀さまは変わらずに「いつでもお前と一緒に居てるからね」とおっしゃってくださっている。

私がさまざまな先生方や父親や先輩方から聞かせていただいた阿弥陀さまは、こういう阿弥陀さまなのであります。私がご門徒さまに「こんなご法話がありますから、阿弥陀さまに願いごとをしてはいけませんよ」とか「別にいいんですよ」とか言うのは簡単ですけど、筋が違うということに気づかせていただきました。だから、私が通わせていただいた阿弥陀さまは、こんな如来さまですよということを書かせていただきました。

宇野行信先生が「浄土真宗のご法義は頭を下げる教えではありません。頭が下がる教えなのですよ」とお教えくださいました。

私が願うより先に阿弥陀さまは私を願い、たとえ私が私自身を分からなくなるようなことがあっても、阿弥陀さまは変わることなく、私と私の思いを支え続けてくださっておるのであります。だから頭が下がるんです。私が頼んで初めて動いてくださる如来さまじゃあない。阿弥陀さんは**「お前さんが心配するようなことは全部分かってる、安心して今できることを精一杯やっていこうね」**と、いつも同じお顔でお立ちくださっておるのではないでしょうか。

（太字編者）

『あたりまえの不思議』探求社